

の中で過ごしてしまはふとした。

くすくす笑ひながら小女が入って来て、炬燵の上を覗きこみながら、手紙を一本置いて行つた。

彼に手紙の来る事は珍らしい事だつた。鄙びた炬燵蒲団の上に置かれた封筒は、不調和に贅沢なものだつた。彼は直ぐに差出人を思ひ浮かべて、一寸驚いた。どうして自分の居処を知つたろう。不思議にさへ思へるその事より、彼にはまた、偶然投入れたその手紙の内容の方が興味あるらしかつた。彼は講談本を伏せて封を切つた。

中からはふんと強い香料の匂ひが立つた。彼は一瞬、贅を凝した富者の書齋を思ひ浮べた。

……クリスマスには、昨年のやうに皆様をお待ちいたしません。あなたもなにとぞ午後五時半までにおいでを願ひます。今年には宅の者もふえましたから賑やかなクリスマスが出来やうと存じます……。

彼はこの思ひがけなかつた唐突なクリスマスの招待に笑つてしまつた。この山にゐる彼へも午後五時半と時間をきつてよこしたことも、いかにも楽しい人々の楽しい招待らしく想像されて微笑した。

彼は古びた炬燵の温もりと、華やかな書簡箋から立つ香氣との不可思議な調和に包まれて、遙かに都会の暮迫つた情景を思ひやつた。洋雜貨店の店飾、リボンで手際よくかゞつた贈物の化粧箱、洋室の窓から洩れる明るい灯、暖炉の燃えたつ赤い火、そこに集つた楽しさうな人々……そんなものを、忘れてゐたも

のをふと思出したやうに、彼は眼に浮べてみた。今年のクリスマスには、と、誰彼と交したかりそめの約束の一つ二つもふと思ひ出された。彼はすぐに遠く別れた人々に、せめてこの山宿からのクリスマスへの挨拶を送らうと思ひたつた。

暮れか、る明りほしさに障子をあけると、いつか外は雪になつてゐた。裏山かけてた、一色に暮れてゆく薄明りの中に、忍びやかに降りだした雪は、彼にひとしほ都会のクリスマスの集りへの思慕をつのらせた。

彼は暫く冷い廊下に立つたまま、降りつゝの雪に眺め入りながら、山からの挨拶の言葉と、それに添へて小包にすべき贈物とを考へた。ふと、彼は違棚から一枚の紙片を取出して来て雪明りに仔細に見入つた。それは彼がつれづれの二夜をかけて、何にする的ともなく楽しく苦心して引いた山荘の設計図である。彼は、それと炬燵の上の古びきつた講談本の一冊とを、好奇心の心に富むクリスマスの集りの真中へ送込んでやらうと決めた。

(曲水 8-1)

く　ら　や　み

雨あがりの夜更けの闇が、しつとり罩めてゐた。女の家は、いつものとほり、寺のうしろの茶畑の中に、独り住の彼女自身のやうに、淋しく傾いた棟を横たへてゐた。

風はいつかやんでゐた。

ひとしきり、一匹の犬が、勝手口の外に来てゐて、雨戸の中